

詩編 第103編 2節

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」

なんと喜ばしい歌だろうか。力強い、確信に満ちる讃えの言葉だろうか。歌う者の人生には数えきれない苦難や困窮のときもあったはずである。人生はそのような現実があることを否めないからである。むしろ、喜ばしいことを遥かにこえて、大変なことが起こり続ける。別離があり、死別があり、歌う本人が死のまえに膝まずく日が来る。それでも、ここは歌う。

この時代を見渡せば、三年越しの感染症がいまだ止まず、それにさらなる苦難をもたらしている東欧での戦禍が続いている。とてもとても歌が歌えるような世界の空気ではない。嘆きの歌なら毎日絶えることなく聞こえる。それでも、喜びの歌が唇に宿る。

たとえどのような時代にあっても、どのような苦難に直面していたとしても、歌い手は、主をほめたたえよ、と歌う。自分を歌うのではなく、また、時代を歌うのでもない。主をほめたたえるのである。その主は、良いことをしてくださるお方と歌う。ありとあらゆる悪いことが起こるなかで、主こそ良いことをしてくださるお方であることを知っている。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな、と歌い手自身に言い聞かせる。主がそこにおられるから。

2022年4月26日